手拳大の顎下部類表皮嚢胞の1例

嬉野 智子・久保 秀郎・田中 陽一・堀之内 康文
迫田 裕二・竹之下 康治・岡 増一郎

A case of fist-sized epidermoid cyst of the submandibular region

Tomoko URESHINO・Shuro KUBO・Yuuichi TANAKA
Yasufumi HORINOUCHE・Yuji SAKOTA・Yasuharu TAKENOSHITA
Masuichiro OKA

Abstract: Dermoid and epidermoid cysts occur congenitally by entrapped ectodermal tissue during embryonic development, or adventitiously inflammatory and traumatic implantation of the epithelium.

In the maxillo-facial region it is found on the floor of the mouth, especially in the middle, but also occasionally occurs in the submandibular region.

We have experienced one case of a relatively large epidermoid cyst in the left submandibular region of a 51 year old woman. The lesion was clinically suspected of a benign tumor of the submandibular gland and was surgically enucleated, but later histopathologically diagnosed as an epidermoid cyst.

Key words: dermoid cyst, epidermoid cyst, submandibular region

緒 言

類皮嚢胞ならびに類表皮嚢胞は、全身各部に発生し、その発生機序は先天的には胎生期における外胚葉道残物の迷入、後天的には外傷、炎症、手術などによる上皮組織の迷入に由来する¹⁾と考えられている。したがって、外胚葉迷入の可能性の最も高い身体の中中部に発生するものが多く、口腔領域では口底やオトガイ下の正中部に最も多く、側方に生じるものはまれである^{2,3)}。

今回われわれは、左側顎下部に生じた、比較的大きな側方型類表皮嚢胞の症例を経験したので報告する。

症 例

患 者：51歳 女性。
初 診：昭和61年6月■日。

主 訴：左側顎下部の腫瘍。

現病歴：昭和61年1月、左側下顎角部付近の腫脹を自覚したが、疼痛や皮膚の発赤など他の症状がなかったため放置していた。その後、腫脹が徐々に増大し、鶏卵大となったため、同年4月■日、某内科を受診し、この頃より、嗔声、咳、喀痰を認めた。4月■日、同医院にて生検を施行されたが、良性との結果で放置していた。5月初旬より腫瘍はさらに増大し、また下方への増大傾向も加わり、形状は半球形を呈するようになったため、6月■日、当科を初診した。

家族歴・既往歴：特記事項なし。

現 症

全身所見：体格、栄養状態ともに中等度で異常所見は認められない。

局所所見：口腔外所見として、左側顎下部に61×45 mmの半球状の腫瘍があり、境界比較的明瞭、弾性硬で、波動は触れない。同部の被覆皮膚には、生検後の癒痕およびその周囲の発赤以外には異常を認めない(写真1)。

口腔内所見としては、左側の13~7相当部の口底にびまん性の腫脹を認め、双指診にて弾性硬の腫瘍を触知するが、圧痛、発赤は認めない。唾液分泌量は左側に減少を認めるが、口腔乾燥感には自覚していない。

検査所見：唾液腺造影では、腺系の外方への圧迫所見

九州大学歯学部口腔外科学第2講座

(主任：岡 増一郎教授)

Second Department of Oral Surgery, Faculty of Dentistry, Kyushu Univ. (Chief: Prof. Masuichiro Oka)

受付日：昭和62年12月21日

写真 1 初診時顔貌

写真 2 echo 所見 (上: 初診時, 下: 摘出物)

写真 3 摘出物 (上) および摘出物の剖面 (下)

のみで、導管の破壊像は認められず、腺体全体の形態は不明瞭である。echo では一塊とした、境界比較の明瞭な mass を認める (写真 2)。

臨床診断: 左側顎下腺腫瘍の疑い

処置ならびに経過: 昭和61年6月■日, 全麻下にて口腔外より生検時の瘢痕を含めて皮切を加えて深部に到達したところ, 圧泥状の偽波動を認めるようになった。広頸筋下に被包された嚢胞が, 上方は顎舌骨筋下, 前方はオトガイ舌骨筋下にあり, これを, 瘢痕部で癒着した顎下腺の一部とともに, 嚢胞壁を傷つけることなく一塊として摘出した。術後より, 軽度の左側舌神経および舌下神経の麻痺を認めたが, 時間の経過とともに軽快し, さらに顎下腺腫脹もなかった。なお嗄声は, 術前に比べて軽減している。

摘出物所見: 摘出物は, 大きさ $85 \times 35 \times 32$ mm, 重さ 98 g, 弾性軟の長形球状物で, 表面は強靱な被膜に覆われていた。内容物は黄緑色の非常に粘稠な液体を混じた, $\phi 2 \sim 3$ mm のおから状顆粒であった。(摘出物の echo 所見はこの顆粒状物を示していた) (写真 3)。

病理組織所見: 嚢胞壁は角化性扁平上皮に被覆された線維性結合組織からなり, 内容物には, ケラチン, 好中球などが認められた (写真 4)。

病理組織学的診断: 類表皮嚢胞。

写真4 病理組織像(上:×200, 下:×400)

考 察

類皮嚢胞ならびに類表皮嚢胞は、全身各部に発生し、New and Erich⁴⁾によると肛門部に最も多く、次いで卵巣、頭頸部の順であったと報告されている。顎口腔領域では主に口底部にみられるが、まれに頬部、口唇、舌、顎骨などにも生じる。口底部に発生する嚢胞は、本邦では、Bergmann-萩崎の分類が汎用され、顎舌骨筋をさかいに上方に位置する舌下型、下方に位置するオトガイ下型、両者にまたがる舌下-オトガイ下型の3型に分類されている。その発生率は、舌下型が50~70%と最も多く報告されている^{5,6)}。また左右別では、Debounelle⁷⁾は正中線上にある正中線型と、左右いずれかに偏在する側方型の2型に分類しており、正中付近に発生するものが多く、側方型はまれである。

嚢胞の大きさについては、梅実大から小児頭大まで種々報告されている⁸⁾が、一般に長径50~60mm、重量30~40gの鶏卵大のものがもっとも多いようである。本邦の過去の文献における巨大症例21例では、口底部の正中付近に発生した例が多く、顎下型、側方型は少数であった(表1)。

発生機序については、先天的、または後天的な外胚葉

表1 本邦における側方型類皮・類表皮嚢胞の報告例(重量80g以上、もしくは全長80mm以上)

報告者 (年)	年齢・性	発生部位	大きさ (mm)	重量 (g)
1. 松井 ¹⁶⁾ (1955)	28・男性	舌頤下	90×80	67
2. 稲守 ¹⁷⁾ (1957)	27・女性	舌頤下	80×60×55	130
3. 山崎 (1978)	28・女性	顎 下	78×50×30	80
4. 本症例 (1986)	51・女性	顎 下	85×35×32	98

組織の組織内迷入によると考えられており、先天的原因を考えるものとして、Bergmann⁹⁾の鰓弓癒合部への外胚葉迷入説、Hassel¹⁰⁾の顎頤異常埋没説、Colp¹¹⁾の無対結節異常埋没説などがある。後天的原因として、Ackerman¹²⁾およびAnderson¹³⁾は、炎症、外傷などにより、分離残存した上皮からも発生すると述べている。また、発現年齢についてみると、一般に本嚢胞は思春期以後の青壮年期に多いとされており、大野ら⁸⁾は10歳から29歳までで全体の52%、黒川ら¹⁴⁾は55%を占めていたと報告している。Meyer¹⁵⁾は、本嚢胞が発生学的には先天性の嚢胞であるにもかかわらず、乳幼児期に発現することが少ない理由として、発育が緩徐で、汗腺、皮脂腺などの機能が活発になる思春期に急速に増大する傾向があることをあげている。本症例においては、外傷、炎症、手術の既往はなく、発症は51歳と高齢でありその発生の詳細は不明であるが、先天性のものであろうと考えた。

本嚢胞の治療法については、外科的全摘出が最良とされている。本症例も全摘出を行い、術後1年4か月経過した現在、再発は認めていない。

結 語

今回われわれは、51歳の女性の左側顎下部に発生した85×35×32mm、98gの比較的大きな類表皮嚢胞を経験したので、若干の文献的考察を加え報告した。

本論文の要旨は、第51回日本口腔外科学会九州地方会(北九州)にて口演発表した。

引 用 文 献

- 1) 石川梧朗監修:口腔病理学Ⅱ. 改訂版, 永末書店, 京都, 1982, 401-403頁.
- 2) 山崎 正, 細野 純, 他:巨大な顎下部側方型類皮嚢胞の1例. 口科誌 29: 392-397 1980.

- 3) 大山 茂, 竹内友康, 他: 口底部側方型類皮囊胞の2例. 口科誌 31: 672-677 1982.
- 4) New, G.B. and Erich, J.B.: Dermoid cysts of the head and neck. Surg Gynecol Obst 65: 48-55 1937.
- 5) 矢尾尚武, 高木 慎, 他: 類表皮囊胞の1例. 日口外誌 27: 657-661 1981.
- 6) 大野邦博, 曾田忠雄, 他: 口腔領域の類皮囊胞50例の臨床統計ならびに本邦における文献的考察. 日口外誌 25: 842-847 1979.
- 7) Debounelle: 文献2), 3) より引用
- 8) 山田隆一, 富久尾明德, 他: 口底に発生した大きい類表皮囊胞の1例. 日外誌 23: 794-797 1977.
- 9) Bergmann, E.: Handbuch der praktische Chirurgie. 4 Auf. Bd. 1. Stuttgart, 1913. p 976-978.
- 10) Hassel, R.: Die Mundbodendermoid Entwicklungsgeschichtliches Diagnostisches und Therapeutisches. Beiträge zur Klin Chir 83: 332-351 1913.
- 11) Colp, R.: Dermoid cysts of the floor of the mouth. Surg Gynecol Obst 40: 183-195 1925.
- 12) Ackerman, L.V.: Surgical Pathology. 3 th Ed, Mosby Co, St Louis, 1964, p 122-125.
- 13) Anderson, W.A.D.: Pathology II. 8 th Ed, Mosby Co, St Louis, 1985, p 1639-1940.
- 14) 黒川英雄, 姫田東高, 他: 舌小帯に発現した類表皮囊胞の1症例. 日口外誌 33: 1655-1660 1987.
- 15) Meyer, I.: Dermoid cysts (Dermoids) of the floor of the mouth. Oral Surg 8: 1149-1164 1955.
- 16) 松井隆夫: 口腔底に生じた大なる上皮囊腫の一例(抄). 日耳鼻 58: 643 1955.
- 17) 稲守浩一郎: 巨大な口腔底皮様囊腫の一例. 耳鼻臨床 50: 620-623 1957.